

感謝の気持ちを言葉に乗せて

6年 M・Sさん

「たくさんの方の思いやりが煮こまれたカレー」

その言葉に私は感銘を受けた。この言葉は、地震と津波というつらい状況を経験し、その後食べたカレーライスに対して小学生の悠太が心で言った言葉だ。

この言葉から、私は、「本当の意味での感謝とは何だろう」という疑問を持った。同じ小学生の悠太の言葉だが、私が普段使っている「ありがとう」とは何か重みが違うような気がしたからだ。

「感謝の重み」とは何だろうか。

そもそも、人が人に対して思う感謝なんて比べることができるのだろうか。それでも、私は自分なりに考えてみることにした。悠太の思いが重く私に届いたのは、悠太が相手の苦労や努力、思いを理解したうえで、「ありがとう」という感謝の気持ちを持ったからではないだろうか。その裏には相手の気持ちによりそいたいという悠太の思いがあつたに違いない。そんなことができたのは、震災を経験したことで、自分はずっと支えられている、ということを実感したからなのだろう。そんな悠太は周りの人に感謝の気持ちを伝えるために、自分に合った方法である、「学級新聞」を選んだ。そして、それは学校の生徒だけでなく、なん所にいる人やボランティアの人などたくさんの方を元気づけた。

私にもそんなことができるだろうか。私は悠太とは違い、震災を経験していない。けれど、「海よ光れ！」を読んだことで、震災を経験した人の気持ちを少しだけ知ることができた。私と同年代の子も達が困難の中、ひなん所で過ごした様子は、驚きの連続だった。それはほんの一部で、理解したとはいえないのかもしれないけれど、大切なことを教えてくれた。

相手の気持ちを考え、感謝し、伝えていく。それが、自分のことを思いやってくれた相手への恩返しとなっていく。

今まで深く考えたことのなかった「感謝」について、改めて考えさせられた。これから私は、この本を読んで受け取った「心」を大切にしてまわりの人への感謝を忘れずに生きていきたい。